

村落社会と講組織—19世紀初頭を中心として—

東北大学大学院文学研究科博士後期課程(国史) 大越 良裕

近世後期各地の村落に見受けられるようになる講には、大きく分けて二種類存在する。まず一つが地域村落において、無尽講に見られるような商業的・経済的活動と密接に関連した講である。またもう一つが、地域社会における堂社を新たに祀ったりあるいは再建したり、戸隠山・善光寺の参詣のための講を組織したりした、地域村落の寺社に対する信仰や民俗宗教との密接な関連における講である。これら二種類の講について、信州上田藩上塩尻村(現長野県上田市)の史料を用いて、前者については、それぞれの同族団の長として位置付けられるであろう人物が代表として(?)参加しているのに対して、後者に関して言えば、村落の(ここでは上塩尻村)構成員たる家の長がほぼすべて参加していることがうかがえる。この両者の相違点については、前者が地域外の商業活動の要素を含んだものであるために、村落を超えた領域での論理が介在し得る存在である(すなわち、社会的に商業活動を通じて村落内領域では帰結し得ない要素を含んだ存在である)のに対して、後者は村落社会の枠組みの中で地域社会における一定の社会的な役割を担う必要性から、村落社会内の社会的秩序維持の論理が存在していることがうかがえる。そういった意味で、それぞれの講の構成単位の負担の割合がどれだけであるかを分析することによって、両者の講組織の形成・維持がどのような構造になっているのかを明らかにしていく。また、講組織形成の要因として、それぞれの講の構成単位の、経済力に裏付けられた社会的地位の向上が社会的状況として存在するが、寺社参詣・信仰の高まりや堂社の再建・石塔の建立を目的とした講組織が、そうした状況にともなって村落社会内の秩序維持の必要性が高まってくることを明らかにし、地域・村落において単に宗教的な紐帯の強化を目的としたものではないといった、講組織の形成要因の一側面を示してゆく。さらに、そうした「講」と呼ばれる二系統の組織の形成・維持の原理が、講組織の構成単位である家や同族団の加入目的によって様々な要素をはらんでいるために、村落内部における重層構造としては捉えきれない側面が存在していることを、他方では、講組織の構成単位の種々の活動によって生じる責任の所在や、その活動の範囲自体も示していることを考察する。

そういった両者の講の組織構造の実態を明らかにし、その上で、講組織の存在意義や役割が、どのような歴史的背景によって規定されているのか、そしてどのような歴史的な変遷をたどっていくのか、化政期を中心として寛政期から幕末期までを概観してゆく。特にここでは、地域内外経済の発展との関わりであるとか、あるいは上田藩の綿などの商業統制に見られるような藩政の具体的な影響力、さらにはそうした状況下における村落社会の民俗宗教や寺社参詣・信仰への関心の高まりといった、地域・村落レベルにおける様々な要素との関連に着目して、それぞれ政治・経済・社会の村落に与える影響がどの程度のものであり、村落構造や講の組織構造との関わりにおいてどのような役割を果たしていたのかを分析的に考察してゆく。そうした検討を通じて、19世紀の初め江戸を中心として起こった化政文化に見られる時代的様相が、単に江戸に限定されたものではなく、地域・村落においても大きな時代的意義を持っていたことを明らかにし、そうした時代背景によって村落構造が大きく変動することを論じてゆく。ただ今回については、その経過報告であり、その見通しを提示することになる。